



2017年6月
第364号
bestopia.jp

パリ通信
第66号

イタリア旅行

今般、色々思い切って明るいイタリアに旅をしてきました。

6月12日の深夜出発、6月27日の早朝帰国という久しぶりに長い海外旅行でした。体力の衰えに自信をなくしていた時期、かなりの冒険的なスケジュールです。目的は宗教改革前のイタリアの芸術にどんな変化があったのか、あったはずであるという仮説を立てて、聖フランシスコ、ジョット、フラ・アンジェリコ、レオナルド・ダビンチの絵を見、そこに何らかの主張が在るのではないかと思っていたところワールド航空サービス社がアッシジをテーマにした旅を案内してくれました。本来ならばルター宗教改革500年記念旅行に参加する予定でしたが昨年の12月現在では体力に自信がなくお断りしました。その後自分を取り巻く環境が大きく変化し体力をつけねばならないと思い訓練をして、今回の旅を挙行しました。

深夜出発の魅力に潜んでいたリスク

私の旅は全てが特典航空券の利用ですから、団体旅行に合わせるのが難しく今回も前後が個人旅行になりました。特典航空券はいつでも乗れると言うのではなく航空会社の内規によって制限されます。ともかく今回取れたのは6月12日深夜0時50分羽田発フランクフルト経由ローマまでのファストクラスでその日のうちに余裕を持ってパレルモに入れる計画でした。

ところが殆どの乗客が出国手続きを終え搭乗間際の深夜0時20分頃、出発が遅れるとのアナウンスがあり、ラウンジにいる人はそこで待機するように要請されました。副操縦士が突然倒れ、代わりの副操縦士を手配しており、手配が付き次第出発するとのこと。結局手配が付き出発可能

な時間は午前8時となりました。要は8時間遅れということでフランクフルトからローマまでの飛行機の手配もままならず、ましてや、ローマからパレルモはその日のうちに到着する目途がたたなくなってしまいました。ことは深夜、イタリアでも早朝で連絡は不能という状態となりました。

次に考えたことは寝ることでした。ともかく羽田空港近くのホテルを予約しようとしても深夜、やっと品川駅近くのホテルが取れたので、そこに行くと言いましたところ出国手続きが終わっているからここから出ることは出来ないという結論となってラウンジの椅子で待機を要請されましたので「とんでもない。わざわざファストクラスに乗れるまでマイルを貯めたのは横になってフライトできるからであって、坐って行くならエコノミーで行きますよ」と抗議をしました。私の年齢で独りで電話で海外のホテルを交渉しているのを見かねたのか役職付きらしい人が出てきて特別室に布団を用意するから3時間位なら横になれるという提案をしてくれましたので品川のホテルをキャンセルしてもらい6時迄仮眠できました。まだ出発までは2時間あるわけでラウンジに戻りボーと待っていました。本を読む気も起こらず疲れ切っています。

後日分かったことは長距離便には機長2人と副操縦士1人の3人体制でないと飛行出来ないルールになっているということ。安全運行を優先するナショナルフラッグとしては当然のことなのです。問題は深夜便については交代待機義務を23時30分に解除するという。問題の副操縦士が突然倒れたのはその後のことで既に地上にいる交代要員は家路にあるか休息に又は休暇に入ってしまったということなのでしょう。全日空では今回の事故で深夜にも待機義務を解かないという措置をとるとのことですが、そのマニュアル変更にわたし達は貢献したということになります。

さて、これで8時に出発できるかと思いきや、乗客にも^{つわもの}強者がいます。すべて結果から分ったことなのですが、7時30分から搭乗が開始され8時の離陸寸前になって一人の乗客が旅を中止するという。ファストクラスの乗客です。飛行機は乗客と手荷物が一体管理されており、搭乗しない人の手荷物は降ろさなければなりません。テロ対策です。手荷物に爆発物が入っているかもしれないからです。当該人の手荷物を降ろすのに

1時間かかり離陸は9時となりました。フランクフルトからローマへの乗り継ぎ時間が短くなるのでわたしは乗換援助を依頼して15分差で間に合わせてくれました。私とその飛行機に乗らないとローマへの飛行機は飛べないか、又は私の荷物を載せないで飛ばなければならないという選択をルフトハンザ航空がせねばなりません、ANAとルフトハンザは同じグループですので荷物は自動的に移動し載せられてしまいます。自宅を出てフランクフルトまで24時間かかりました。

ローマからパレルモはアリタリア航空です。グループが違いますから出国手続きをして手荷物を受取り、搭乗場所を国際線から国内線にかなりの移動をして搭乗手続きをしなくてはなりません。個人ですから4時間をみていました。航空券も無効になっています。ホテルも当日キャンセルです。体力はヘトヘトです。パレルモは諦めローマのホテルを探して団体旅行の皆さんとの合流をローマで待つことにしました。

もうこんな旅をすることはありませんが、これから旅をされる若い人のために私の反省点を記しておきます。

エアライングループの異なる飛行機は同日には乗り継がないことです。私の今回の例ですと、第一日目はローマ止まりにして、翌日ローマを出発して移動することです。（エアライングループについては若い方はよくご存知ですから割愛します）

さて、今回の損害はどうなるのでしょうか？

パレルモはキリスト教とイスラム教の融合が見られる教会と絵画があり、イスタンプールの的な雰囲気があり、最後の旅として絶対に行きたいと思い現地での案内を個人的に探して依頼してありました。その金銭的損害は計算可能ですが、「私個人の最後の旅で絶対行きたいとの希望」は算定不可能です。これは諦めるしかありません。その代償として全日空は一律に3万円を現金で配布しました。

旅の楽しい話が前から脱線しましたが、この後27日迄、健康が支えられ知識の豊富な添乗員に恵まれ新しいことが沢山学べる良い旅でした。その一端を記します。

コルトーナへの一人旅

団体旅行の自由行動日に列車とバスを乗り継いでフィレンツェから田舎町コルトーナに行きました。もう20年位前になりますが、野秋文吾さん（故人）が「小原さんにはコルトーナに連れて行ってあげたかったなあ。あの絵を見せたかった」と言われ逝去されました。知人が一人もいない土地で貧困時代の私を支援してくださった旧・園池製作所から独立し優れた技術を日本の中小企業に伝承された温厚な方でした。

あの絵とはコルトーナのフラ・アンジェリコのもう一つの「受胎告知」のことです。フラ・アンジェリコの受胎告知はプラド美術館、フィレンツェのサンマルコ修道院にもあり、私は既にそれらを見ていましたので、いつの日かコルトーナに行きたいと願っていました。

（今回、サン・ジョバンニ・ヴァルダルノという街にあるサンタ・マリア・デッレ・グラツィエ教会にもあることを古賀さんから教わりました）

「受胎告知」は多くの画家がそれぞれの考えに基づいて描いており、同



じフィレンツェのウフィツィ美術館のシモーネ・マルティーニの代表作も有名です。

この作品は1333年頃でフラ・アンジェリコの絵より100年前のものです。この時代にしては画期的な曲線美が特徴的です。今回の旅でアッシジの聖フランチェスコの活動初期のポル

チウンクラの小聖堂にもこの構図の受胎告知が掲げられていました。イラーリオ・ダ・ヴィテルボという画家が1393年に描いたものだそうです。もう少し後ならフラアンジェリコの受胎告知になったかも知れません。（次号で詳細を記します）

その他にもレオナルド・ダ・ヴィンチのものも有名ですが、今回はフラアンジェリコの受胎告知を学びました。

フラ・アンジェリコの「受胎告知」

(1)フラ・アンジェリコ (1400頃~1455)

「キリストに関する絵画を描くのであれば、常にキリストとともに過ごさなければならない」を心情とした祈りの修道士画家として有名なフラ・アンジェリコを、ジョルジョ・ヴァザーリは「この修道士をいくら褒め称えても褒めすぎることではない。あらゆる言動において謙虚で温和な人物であり、描く絵画は才能にあふれており信心深い敬虔な作品ばかりだった」「フィレンツェ大司教の地位を提示されたが、それを断った」と言われている。

又、「彼が描いた多くの絵画はすべて聖なるものを扱った作品で、完成した作品に後から手を加えたり、修正したりすることは決してなかった。これはおそらく彼自身の宗教的信念によるもので、聖なる存在から靈感を受けて描いた絵画であるため、完成当時そのままの状態にとどめおかれたのだろう」(ウィリアム・M・ロセッティ)

ミケランジェロは自身で「フラ・アンジェリコの直系」であると宣言しています。影響はレンブラント、ファン・エイク、エル・グレコ、そしてフランシスコ・デ・スルバランに及んでいると言われている。(スルバランの静物画は聖にして神秘的であることを私も実感しています。)

(2)フラ・アンジェリコの受胎告知

魅せられたる魂の宿るフラ・アンジェリコの受胎告知の代表的なものをまとめてみました。

- ①プラド美術館にある、1426年の作品
- ②サン・ジョヴァンニ・ヴァルダルノにある、1430~1432年の作品
- ③コルトーナにある、1434~1436年の作品
- ④フィレンツェのサン・マルコ修道院にある、1437~1446年の作品

今回の学習で②を始めて知りました。サン・ジョヴァンニ・ヴァルダルノの街はフィレンツェから日帰りができる距離です。それぞれの作品を手元の絵はがきとネットから探したものを以下に掲載します

①プラド美術館の「受胎告知」 1426年、サイズは194×194



絵画の下に描かれているのをプレデラといいます。

②サン・ジョヴァンニ・ヴァ
ルダルノにある、1430~1432
年の作品
サイズは194×194



③コルトーナにある、1434~1436年の作品 サイズは175×180



④フィレンツェのサン・マルコ修道院にある、1437~1446年の作品



④は2階への階段の踊り場であり1階から上がっていく位置にあります。

1999年に訪れたときも写真は禁止でした。今回は残念ながら再訪が出来ませんでした。



サン・マルコ修道院にはフレスコ画の「受胎告知」があります。④と同時期の作です。



サン・マルコ修道院の2階には沢山のフレスコ画があります。ここだけで1日が必要です。月曜日が休館です。オープンしている日も入場できる時間が短いですが確実なのは午前中です。

4枚の絵からでもマリアの変化が分かります。今回は自説の解説を省略します。考えを熟成させて解説する 때가来るのを待ちます。

(3)「受胎告知」を見るための常識

素人の意見はここでは控えて常識として身につけるべき点を捕捉します。マリアの赤い服に青いマント（赤は殉教ないし神の愛、青は天の真実をあらわす。中野京子著・名画の謎 p 133）聖霊の象徴・鳩の位置が異なっ描かれているようです。大天使ガブリエルはマリアがひとり読書中の室内（閉ざされた空間は彼女の処女性を示す）に現れ、跪いて神の言葉を仲介する。マリアが読んでいたのはイザヤ書第7章14節「見よ、おとめが身ごもって、男の子を産み、その名をインマヌエルと呼ぶ」の箇所とされています。インマヌエルとは新約聖書マタイによる福音書 1章23節に「神は我々と共におられる」と書かれています。

④のマリアは赤い服を着ていません。要研究です。

(4)新約聖書の「受胎告知」の記述

受胎告知は新約聖書ルカによる福音書1章26-38節に書かれています。

簡略をお許し頂き引用します

天使ガブリエルはナザレというガリラヤの町に神から遣わされた。ダビデ家のヨセフという人のいいなずけである おとめのところに遣わされたのである。

「そのおとめの名はマリアといった。天使は、彼女のところに来て言った。『おめでとう、恵まれた方。主があなたと共におられる』

①マリアはこの言葉に戸惑い、いったいこの挨拶は何のことかと考え込んだ。すると、天使は言った。『マリア、恐れることはない。

あなたは神から恵みをいただいた。あなたは身ごもって男の子を産むが、その子をイエスと名付けなさい。その子は偉大な人になり、いと高き方の子と言われる。神である主は、彼に父ダビデの王座をくださる。彼は永遠にヤコブの家を治め、その支配は終わることがない』

マリアは天使に言った②「どうして、そのようなことがありえましょうか。わたしは男の人を知りませんのに」

天使は答えた。『聖霊があなたに降り、いと高き方の力があなたを包む。だから、生まれる子は聖なる者、神の子と呼ばれる。

あなたの親類エリサベトも、年をとっているが、男の子を身ごもっている。不妊の女と言われていたのに、もう六ヶ月になっている。

神にできないことは何一つない』

マリアは言った。③「わたしは主のはしためです。お言葉どおり、この身に成りますように」そこで、天使は去って行った。(ルカによる福音者1章26~38節)

マリアの態度と言葉を集めてみます

①マリアはこの言葉に戸惑い、いったいこの挨拶は何のことかと考え込んだ。

②「どうして、そのようなことがありえましょうか。わたしは男の人を知りませんのに」

③「わたしは主のはしためです。お言葉どおり、この身に成りますように」

画家の信仰、考え方、時代の要請によってマリアの描き方が変化します。エル・グレコは②から③への変化を見事に描いていることはベストピア第359号に記しました。

シモーネ・マルティーニは①を強調しています。(胸元をおさえ眉をひそめ身を天使から離すようにして戸惑いを示す。中野京子著・名画の謎 p 132)

フラ・アンジェリコは終始③を強調しています。

ルカによる福音書の1章35~38節が絵画の中に記されています。手の位置が全面受容を示し天命を我が身に、神を信じて受け入れています。

グレコの所で私は覚悟を示す手の話をしましたが、フラ・アンジェリコは無条件絶対信頼を現しているように感じます。ここが「祈りの画家」と言われる所以ではないかと思います。

大発見・絵に聖句が入る

コルトーナの絵に感激した私はホテルに戻りパリの古賀さんに写真を送りました。翌日返事がきました。コルトーナの絵には「大天使ガブリエルの言葉が「吹き出し」で描かれ、マリアの言葉は、マリアが身に付けている金の襟に、裏返し（鏡で読み取れる）に描かれています。聖なる対話が言葉を伴って描かれている祭壇画です」



素人の私は日本の本も殆ど読んでいませんが、ここまで研究されている古賀さんの慧眼にあらたに驚きと敬意をいただきました。彼女はルネサンス画家の研究ではフランスでも第一人者です。素晴らしい作品分析集があり、

日本の主な大学の図書館に蔵書されています。

あとがき

6月号のオンが最終日になってしまいましたが、連続性をやっとキープしています。一つの生き甲斐であることは間違いありません。

今回の旅は体力がどこまで持つかという不安を抱えての出発でしたが、添乗員の奥村恵子さんの驚くべき歴史知識に興味を惹かれ、従順な羊のようについて行くことができました。感謝です。

イタリアでは沢山の被害を被った経験から一人歩きには笛とブザーを持って堂々と歩くことを心がけ窃盗の類には巻き込まれませんでした。人に言えない失敗が一つあります。

一人でコルトーナに列車で往復しました。観光地ばかりのイメージでしたが田舎町の駅にはタクシーがありません。バスは一時間に一本ですが時間通りの約束はありません。もの凄い坂の街で目的地に到達するには並々ならぬ苦勞がありました。あの絵に出会ったとき「ヤッター」と叫びました。問題は帰路にありました。下車駅は終点のフィレンツェです。乗り越すことはありませんが盗難の緊張を保ち後何駅と確認していたのですが後2駅というところで睡魔に襲われ意志とは関係なく眠ってしまい途中駅を確認できませんでした。全員が下車したことも分からず熟睡してしまいました。ふと眼を覚まし見回すとまだ乗客がいるのでここはどこかなあと眼をこすりながら3度窓から停車駅を確認しようとしたのですが駅の端っこに止まっていたのでフィレンツェと分からず躊躇して

いましたら遠くのご婦人が「フィレンツェ」と叫んでくれました。大急ぎで下車してゾォーとしました。列車はローマ行きで後5分で出発するところでした。一人旅の限界をまざまざと実感して大反省をしました。この話はここで始めて記します。

又もや1941年が延期になりました。8月には復活します。

